

カサブランカ便り「カサブランカの雀達」

拝啓、時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。JICA21-2次隊の柔道SV(シニア海外ボランティア)の関 雅夫です。私の赴任地のここモロッコ王国カサブランカにも日本にいる雀に良く似た小鳥達があります。今回はこの小鳥達にスポットを当てて、委嘱されております地球市民メッセンジャーのレポート拙文をお送り致します。



一昨年の11月3日に私の赴任地カサブランカに来て10日程色々住まいを探しました。私は海と船が大好きなので、ここ北大西洋に面したカサブランカの海辺が見える物件を探したのですが、家賃が高く、止む無く現在の物件にしました。私はこの物件の5階に住んでおります。

私の住まいは2LDKで北側のキッチンの側にベランダが有り、外の手摺の該当する壁がコンクリート製で二重になっていて真ん中に土が入っているため、草が生えています。このベランダに舞い降りて来てこの草むらに出入している、日本の雀に良く似た小鳥がいました。名前は何と云うのか知りません。この小鳥の鳴き声は日本の雀と違って声が少々伸びます。何で伸びるのか？かつて帆船ビーグル号でガラパゴス諸島を訪れ、かの有名な「進化論」を著した英国人ダーウィンの主張する様に、様々な環境の変化に伴って色々そこに棲息する生き物達が適応・進化して来たものなので有りましょう。

日本の雀と良く似た小鳥が近くを飛び廻っているので、試しにこのベランダの上にアルミホイルで餌台を作り、ベランダの手摺のコンクリート上端にガムテープで止めてこの餌台に「海老のマークの付いた海老米」という日本産の米に良く似た米を入れて様子を見る事にしました。

初めは数羽餌台にやって来て米をついばんでおりましたが、その内段々とこの餌台に来訪する雀達が増えて参りました。ミツバチは飛ぶ運動形態の模様で花(餌)の有る方向を仲間に教えるそうですが、ここカサブランカの雀達はロコミで来るものなのかなんだか知りません。

雀達は、最初はパラパラ我が家の餌台に飛来して来ておりましたが、その内親鳥が子供の鳥を連れて来て口移しに米を与えております。子供の鳥は、目の前にたくさん米が有るのに、羽を震わせて親鳥から餌をねだっております。甘えているのでしょうか？

日に日に来訪する雀達の数が増えて参りました。その内に雀でも一回り大きな雀や、ムクドリのような鳥や夫婦の鳩が二羽、やもめ鳩が数羽、その他の名も知らぬ小鳥等が我が家の餌台にやって来る様になりました。

そうして来訪する鳥達が増えて来る様になりますと、やはり限られた餌の取り合いになります。人間社会と全く同じです。小さい嘴を大きく開けてお互いに威嚇し合っております。そのうち空中戦が始まり餌を食べるのをそっちのけにして空中戦をやっております。何の為に飛んで来たのか理解に苦しみます。

ある時ふと窓辺をみると、餌を食べるのをそっちのけにして仲間の雀の羽に食い付いて離さない雀を見付けました。思わず「やめろ!!!」と窓ガラスをガラッと開けた所、流石に相手に噛み付いている嘴を離して逃げて行きました。そんな訳で窓辺にもう一箇所餌台を作ってやりました。そして窓辺の新設の餌台の脇にもこの海老米をばら撒いて置く事にしました。

しかしながら餌台が増え、食事場所も大幅に広くなり、餌も前より多くなったにもかかわらず、空中戦は一向に収まりません。童謡「鳩ぼっぼ」の歌詞に有る様に皆で仲良く餌を食べ合えば良いのに、との私の思いとは裏腹に、空中戦ばかりやっております。

果ては遂に戦死鳥が出ました。頭をやられ雨に打たれてベランダに死骸が転がっておりましたので、ベランダのコンクリートとコンクリートとの間に有る土の中に葬ってやりました。この鳥はこの土に生えている草花の栄養分になるのかも知れません。



人間社会で言われている、死んで土に還るといった所でしょうか。桜の木の下に葬って欲しいとの遺言で、桜の木の下にその人を葬った所、この桜の木はこの葬られた人の体のリン分だか何だかを栄養分として吸い上げ、見るも美しい桜の花が咲いたと聞いた事が有ります。

そして、さらに戦慄すべき事態が起きました。日本のチョウゲンボウの様な小型の鷹の様な鳥が窓辺に居ます。近寄って見るとこのチョウゲンボウの様な鳥が逃げた後に、小鳥を食べた残りの羽が沢山散乱しておりました。海老米が餌台に有る、餌台に小鳥達が集まって来る。この小鳥達を狙ってチョウゲンボウの様な肉食の鳥がやって来るという生態系が出来上がってしまいました。

しかしそんな中でも私がデジカメを持って写真をとっても一向に逃げない雀がいます。見た所いかにも子供の鳥の様です。この雀と私との間に窓ガラスは有るものの距離は僅か50センチも有りません。デジカメのフラッシュを炊いてバチバチ写真を撮影しても一向に逃げようとしません。餌を無心についばんでおります。そればかりか日が落ちかける時になっても一向に帰巢する気配が全く無く、挙句の果ては窓辺でうとうとしております。流石に糞公害になると困るので、窓ガラスを開けて手を振って帰って貰いました。



こんな雀もいますが、殆どの雀達はじっと私の動きを注視しながら餌をついばんでおります。チョウゲンボウの様な肉食鳥も飛来しますので警戒心が無くなったら一巻の終わりの事態にもなりかねません。

我が家に来ている雀達の中に一羽、どうした訳か尾羽の無い鳥がいます。飛行機だったら尾翼がないと飛行不可能なのですが、この尾羽の無い鳥はちゃんと餌台に飛来して来ます。小さな嘴を大きく開けて、他のまともに尾羽が付いている雀達と堂々と渡り合い、餌をついばんでおります。尾羽の無いハンディキャップを全く感じさせません。立派なものです。

我が家の餌台にやって来るのはこれ等雀の類が大半ですが、鳩やムクドリの様な鳥、時々名も知らぬ何だか良く解らない小鳥、そして極稀にチョウゲンボウの様な肉食鳥がやって来ます。

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

鳩やムクドリのようなやや大きめの鳥達は蚤の心臓と申しますか、私が手を振ると直ぐに逃げて行きますが雀達は段々と手を振った位では逃げなくなって来ました。小鳥達の方が肝っ玉据わっていて度胸が有るのか？餌を食べる深刻度がより強いのか？良く解りません。私が食事中に窓辺を見る時に一斉に逃げるのは、私が急に振り向くので鳥達が驚くのかも知れません。



さて、ここカサブランカは七つの海（南・北太平洋、南・北大西洋、インド洋、南氷洋、北氷洋）の内の北大西洋に面している為、私の家の上空には日本のかもめよりも一回り大きめのかもめが沢山飛んでおります。しかし海老米では大きなかもめの腹の足しにならないのか我が家の餌台には舞い降りて来ません。

この四月頃より日本で見かけるツバメと同じ様なツバメが上空を舞っておりますが、日本のツバメと同じく飛んでいる虫達を餌にする為か、我が

家の餌台にはこれも舞い降りては来ません。日本のツバメに比べると一回り大き目ですが飛行形態は全く同じです。

我が家の餌台に一度クスクスの小さな粒を入れてみた事が有りました。餌の大きさが小さ過ぎるのか飛来してくる鳥達は殆ど食べてくれませんでした。炊いたご飯は鳩に人気がありますが雀達は嘴にくっついて食べにくい様です。パンは一応食べてはくれますが一粒残らず食べる海老米に劣ります。やはり生の海老米が一番人気です。

私の食べる米と素材は同じ食べ物です。海老米が切れて茶色っぽい米に差し替えた事が有りました。やはり食べなれた白い海老米が安心して食べられるのか最初はなかなかこの茶色っぽい差し替えた米を食べতেくれませんでした。しかし徐々に徐々にやはり空腹には勝てないのか？食べる様になりました。



「進化論」の著者ダーウィンは、「餌の種類に依って、これ等の餌を食べるフィンチと呼ばれる鳥達の嘴が、変化・進化した。又ゾウガメも、高い所の餌を食べるゾウガメと低い所の餌を食べるゾウガメとでは、首の長さが餌に合わせて進化・発展を遂げた。」と述べております様に、ここカサブランカの雀達も私が与える餌の変動に適応して参ります。適応出来ない鳥達は食いはぐれてしまいます。生物は環境にこの様にして適応・進化・発展して行くので有りましょう。

餌台の有るベランダ側のガラス窓を、ガスを使って調理するので換気の為に数センチ開けておいた所、この僅かな隙間より、これ等雀達が餌を求めてだと思いますが家の中に入って来ます。入り口を忘れたものか外に出られずに家の中でバタバタやっております。一度に二羽飛び込んで来た事も有ります。合計して十数羽もこの僅かな隙間から入って来ました。

頭の良いのは事が起こる前に察知し、普通なのは事が起きてこれを経験として蓄積し、馬鹿は事が起きてこれを経験として蓄積せずに何度も同じ事を繰り返すようです。ここカサブランカの雀

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

達は、何度も何度も僅かな隙間から私の家の中に飛び込んで来ました。今はこの鳥達に飛び込まれない様に、窓ガラスは最小限の隙間に開けて換気を行っております。

ところでこれ等入って来た雀連中の処置であります、飛び込んで来る度にデジカメで写真を撮って逃がしてやります。この雀と何とかツーンショット迄漕ぎ着けた事もあります。餌を求めて入って来るのは良いのですが、入った後出る事迄は考えが及ばない様に見えます。海で生まれた魚達も淡水の川へ餌をも求めて遡上する時に帰り道の事等一切考えずに川を遡ったものなのでしょう。そして環境の変化に上手く適応出来た魚達だけが淡水の川で子孫を繁栄させて行ったものでしょう。砂漠を隊商等で移動するラクダは暫く水を飲まなくても背中のごぶに溜めてある水分だから？で補給して行動出来ますし、鼻の孔なんかは砂嵐の時等に砂が入らない様隙間を作らずに塞げる様に上手く出来ております。環境に上手く適応している一例であります。



さて、ここモロッコ王国ではサマータイムと言って日照時間が延びる為、4月初旬より9月初旬頃迄時刻は一時間後ろにずらします。今迄夕方の七時の時刻が八時となる訳です。冬場は六時頃になると真っ暗だったのが、ここカサブランカで5月31日の午後七時、サマータイムの八時ではまだ外は夕方と言った所でしょうか、鳥達が十分行動可能な明るさを保っております。そこで、ここカサブランカの雀達は一年で日照時間が長

くなる頃は、我が家の餌台に冬場よりも長時間入れ替わり立ち代り飛来して来ます。今サマータイムの八時過ぎですが、未だ我が家の餌台に雀達が餌をついばんでおります。食欲旺盛と申しますか、餌への執念といった所でしょうか。

いつの間にかこれ等雀達に取って我が家の餌台はかけがえの無い貴重な餌場に変貌した様です。恒常的・且つ安定的に我が家の餌台に飛来すれば餌が腹一杯食べられる訳です。

前記の尾羽の無い雀も頻繁に我が家の餌台にやって来ます。雀達の親鳥も子供の鳥を連れて良く飛来します。子供の鳥は親鳥を注視しており、親鳥にぴったりと寄り添っております。人間の赤ちゃんはお母さんと一体で、哲学ではこれを「自他一体感」と言うとの事です。これ等カサブランカの親雀達に取ってはかなり子育てが楽になったのかも知れません。これもモロッコでのボランティア活動の一環かと思っ、せつせとこの雀達に餌を与え続けております。

しかし、このカサブランカの雀達とも本年9月25日迄のお付き合いです。後、残り数ヶ月となりました。今の内に海老米を沢山食べて元気に育って欲しいと思っております。まあ自然の中で逞しく生きているカサブランカの雀連中の事ですから、餌台が無くなったら無くなったなりに、めげずにそれなりに素早く対応して逞しく生きて行く事でしょう。それでは皆様もここカサブランカの雀達に負けずに元気でお過ごし下さい。ここカサブランカより皆様のご健康とご健勝とを心から願っております。それでは皆様お体ご自愛の上元気で過ごして下さい。淀川長治ばりですが、さよなら・さよなら・さよなら。敬具

カサブランカ便り「日本人とモロッコ人」

拝啓、時下益々ご清祥のこととお喜び申し上げます。JICA21-2次隊の柔道SV(シニア海外ボランティア)の関 雅夫です。「武士道とは死ぬ事と見つけたり。」との有名な行が「葉隠れ」に有り



関 雅夫さん（平成23年6月）

ますが、自分の考えを纏めるにはやはり「書く事と見つけたり。」で有ります。今、パソコンで入力しておりますから「パソコンへの入力と見つけたり。」になるのでしょうか？

さて、ここモロッコに赴任して来て嫌でも考えさせられた事に「日本人とは何か？」とのテーマが有ります。そこで、この地で人と色々関わった体験や、見たり聞いたりした事柄から、日本人をスケッチ的に考えて行こうと思います。但し日本人とは何か？とのテーマを持って仮に日本人とはこの様な存在だとの結論が現在の時間と空間の中で平面的に出たとしても、

物事には原則と例外が必ずと言って良い程有る物です。

モロッコはかつてフランスの植民地だった事も有り、夏に肌を露に出して歩いているフランス人の様な白人女性から、同じく夏の暑さにもめげず上から下まで真っ黒な服で覆い目だけ出して歩いているムスリム(イスラム教徒)の女性、頭をスカーフで覆っただけの女性、袖なし服で歩いている黒人女性やベルベル人等々、色々な人達がおりますから一概にこうだと決め付ける事等出来ません。歴史は歴史家が作ると言われます通り、歴史家の数だけ歴史の見方は有ろうかと思えます。しかしその中での基本的な見方・考え方は見出せ得るもので有ろうと神山四郎が著書「歴史入門」の中で語っております。この国の歴史も視野に入れながら、モロッコから見た時間と空間と歴史とを踏まえた、立体的な「日本人とモロッコ人の私的スケッチ」として、気楽に読んで頂ければと思います。



今回の「日本人とモロッコ人」は、テーマの対象が幅広く、赴任から僅か二年弱の為、全体状況から何を対象と限定し、本質を如何に捉えるか等々、色々苦慮する所で有りますが、モロッコ人を知るにはやはり歴史を抜きにしては理解し難いので、「モロッコの全て」というガイドブックに書かれて有る大雑把な歴史を記載する事と致します。

マグレブや小アフリカと呼ばれるモロッコ王国は、北アフリカの西端に位置し、北は地中海、西は北大西洋に面している。山脈が走る地中海沿岸と砂浜が続く大西洋沿岸が織り成すコントラストは絶景だ。海と山脈に挟まれた地域は、なだらかな丘が続く穀倉地帯になっている。モロッコ西部の高アトラスと呼ばれる山脈には最高峰ツブカル山(標高4,165m)が聳え、地中海側には海岸沿いにリフ山脈が続く。

その歴史は古く先史時代まで遡り、ラバトやカサブランカを始めとした多くの都市でアフリカ最古の石器も発掘されている。これらの石器は下旧石器時代のもので、ネアンデルタール人が用いたものとの共通点が見られる。上石器時代にはホモサピエンスと非常によく似た猿人類の登場が確認されている。新石器時代はアフリカ北部にフェニキア人やカルタゴ人が登場し、モロッコの発展を促した。後、ベルベル人が先住民族に取って代わるが、ローマやヴァンダル、ヴィザンチン人等の襲撃に会う。真のモロッコの歴史は預言者ムハンマドの娘婿アリーの子孫にあたり、ベルベル人からイマームとして認められたイドリス一世がモロッコ北部を統一した8世紀末に幕を開ける。次代イドリス2世の御世にベルベル人、アラブ人による各イスラム王朝が興亡を繰り返すモロッコ初の王国が誕生する。

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

その後、オアシス周辺に広がる今日のシュウヤとシデルマサに王都を移したベルグダ王国が誕生。イドリス朝の支配は9世紀初頭のイドリス2世後も続き、新たなベルベル公国を建国する。10世紀には再びアラブ人が精力を盛り返し、モロッコ全土を支配下に置いたムラビト王朝の時代が幕を開ける。12世紀にはベン・トゥマルトを首長とするムワヒッド朝がモロッコの支配者の座に着く。その座を継ぐアブド・エルムーミンはアトラス山脈一帯を始めアルジェリアやチェニジア、アンダルシアをも支配下に治める。その後も王朝は栄華の一途を辿る。13世紀に軍事的失敗を重ね、文化と芸術に飛躍的な発展を遂げるマリーン朝とそれに続くサアード朝がその後を継ぐ。



17世紀にはムーレイ・イスマイルがメクネスにアラウィー朝を擁立し、近代モロッコの礎を築いた。同王朝の国王ムハンマド5世はフランスとスペインの保護領条約の廃棄と独立声明を発表。1975年、その息子であるハッサン2世の時代にモロッコはサハラ領を統合し、王国の独立を確固たるものにした。

ざっと記述しましたが長く華麗なモロッコの歴史で有りまして、日本と違って色々な民族が入れ替わったり、国を取ったり取られたりと、かなり厳しい体験もしている国家で有ります。日本の歴史は省きます。

さて、ここモロッコでは一にアッラー（神）、二にサッカーといった感じです。前にお便りした拙文「カサブランカ便り」にも書かせて頂きましたが、サッカーの試合が有る時には柔道修行者の数がガタッと減ります。修行者と書きましたが、モロッコ人には修行という概念よりも単なるスポーツの一環でしか無い様です。その証拠に、武道で最も大切な礼法が当地の柔道試合に於いて正確に出来ている試合は極めて稀です。モロッコ王国柔道連盟の審判講習会の度に口をすっぱくして試合の時の礼法を説明し、キッチンと紙に書いて配布したりしていますが、なかなか成果が上がりません。礼法等重要視していないのか？覚える気が無く又有っても直ぐ忘れてしまうものなのか？困ったもので有ります。



柔道もこの地に於いては、エアロビ・筋トレ柔道に変貌してしまっている感じで、嘉納治五郎師範が目指した精力善用・自他共栄の境地とは懸け離れているのが現状です。私は赴任以来、柔道の武道としての礼法を最重要視して指導をして来ました。私がよく指導に行くモハメッド五世ナショナル道場の指導では、アッラーへのお祈りの時刻になると同僚の柔道師範は子供達の指導を私に任せて道場の片隅でアッラー・アクバル（神は偉大也）をやっております。子供達は大人の様に一日五回もお祈りをしなくて良いとの事です。

モロッコ人の一神教に対して日本人の八百万の神、言葉は思考様式・行動様式を表すとの事ですが、絶対神を持たない日本人は神との関わりの中で、神と私、我と汝との関係で絶対の神が無い事から絶対的な私の概念に乏しく、英・米のアイとユーに対して、貴方・お手前・そち・貴様・お前・汝・お主等々、同様に自分・私・僕・朕・おれ・ワッチ・ワッシ・わし・アタイ等々、相手と自分との相対的な関係・相関関係に於いて相手への呼びかけや自分の表現の仕方も様々に変化させております。

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

マルチン・ブーバーは著書「我と汝」の中で、絶対の神に対する我に於いて絶対的な我の概念が出来ると述べております。しかし夏目漱石が小説「草枕」の中で述べております様に、我を通せば窮屈な事が日本人社会では多々有ります。裁判でも和解決着と申しますか、お互いにマア・マア・マアといった事も日本の裁判では多々有ります。裁判所自体がしばしば和解勧告を原告・被告の両当事者に行っております。私がサラリーマンをやっていた頃は、勤務先の会社で根回し等と呼んで、各部署に話を付けて稟議書を通す事が良く行われておりました。



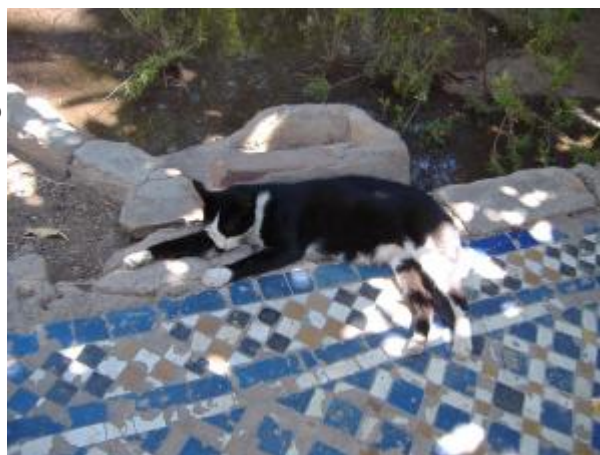
モロッコ人柔道師範達は、私が出席した柔道の集会等で、前後の見境無く喧嘩・口論する事が多々有りました。所謂我が非常に強いので有ります。相手の立場なんかお構い無しに自分の主張を通す行動様式が数多く見られます。エルジャジーダに「古式の形」の演武に行った時等は終点エルジャジーダ駅で降りる時、昇降口で乗車を待っている数多くの学生連中が、我々降車する人の事等全く無視して我先にと乗り込んで来ました。15メートルにも及ぶ津波の如く押し寄せて来たこれ等学生連中を、我々降車客は津波の去るまでドアの端で降車も出来ずにやり過ごすしか有りませんでした。

モロッコ人柔道師範達は、私が出席した柔道の集会等で、前後の見境無く喧嘩・口論する事が多々有りました。所謂我が非常に強いので有ります。相手の立場なんかお構い無しに自分の主張を通す行動様式が数多く見られます。エルジャジーダに「古式の形」の演武に行った時等は終点エルジャジーダ駅で降りる時、昇降口で乗車を待っている数多くの学生連中が、我々降車する人の事等全く無視して我先にと乗り込んで来ました。15メートルにも及ぶ津波の如く押し寄せて来たこれ等学生連中を、我々降車客は津波の去るまでドアの端で降車も出来ずにやり過ごすしか有りませんでした。

私の上司も、柔道経験年齢共私よりも遥かに下で有るにもかかわらず、私の柔道指導方法等全然聞こうとせず、その反面、自分の主張はどんどん言ってくる有様です。得意技は口車、受身が大嫌い、私が乱取りで分投げたらそれ以後、私と柔道をやらなくなりました。まあ、国際協力の為赴任しておりますので喧嘩ばかりも出来ず、適当に柔道の体捌きの如く受け流しておりました。

私の上司も、柔道経験年齢共私よりも遥かに下で有るにもかかわらず、私の柔道指導方法等全然聞こうとせず、その反面、自分の主張はどんどん言ってくる有様です。得意技は口車、受身が大嫌い、私が乱取りで分投げたらそれ以後、私と柔道をやらなくなりました。まあ、国際協力の為赴任しておりますので喧嘩ばかりも出来ず、適当に柔道の体捌きの如く受け流しておりました。

一神教の国民は押しなべて自我意識がとても強い様に感じられます。そこに行くとも神・仏等は、葬式神道・葬式仏教とか言われます様に、我々日本人の大半なのでしょうが、神の概念がモロッコ人に比べて一般的にかなり薄い様に感じられます。何故か？それは日本の風土・気候・歴史等々様々な要因が有ろうかと思えます。



日本は本年3月11日に東日本大震災が起こりましたが、時々この様な大きな地震や津波・台風等も有りますが、概して温暖で四季の変化も有って豊かな自然に恵まれており、田畑を皆で耕して皆で仲良くやっておれば、何百年もの間の太平の世の中、皆で仲良く平和裏に食べて来られた事等も大きな要因なのかも知れません。

皆で仲良く田畑を耕し、温暖な気候で何とかマア・マア・マア・マアの社会で食べて行ける、お家の維持・安泰を図っていれば家族は安穩無事に過ごして行ける、といった体質が日本民族に浸透してしまったものなののでしょうか？少なくともかなり影響しているのかも知れません。悪く言えば事無かれ主義と申しますか安泰に走る嫌いも有りますが、その反面、モロッコ人の様に自我が概して強くなり皆で仲良くお家と共に暮らして行ける体質が醸成・育成されて行ったのでは無いのでしょうか？

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

一神教と多神教、ラクダ・羊・等と共に暮らして来たかつての遊牧民族が多くいたモロッコ、メディナ等城砦都市を築いたものの国土がスペインに侵略されたり、ベルベル人に占領されたりフランスの植民地になったり、この植民地にドイツがやって来たりしたモロッコと、同一民族で四季が有り自然豊かで風光明媚な温帯モンスーン気候の長い間農業国家で有った日本、気候風土の差異等々モロッコから祖国日本を眺めると、これらのフィルターの彼方に日本・日本人の有り様が見えてくる様な感じが致します。



さらに付け加えて、かつて森鷗外の「雁」という小説を読んだ事が有ります。この小説の中に出てくる「お玉」という女性がおります。「何で自分がこうなったのか。誰に対する物でも無いが自分の運命に対して不満を持った。」様な事が書かれて有ります。自分を押さえつけている何だか解らないが有る物、自己主張を抑えられ何か鬱屈した自分の運命に対する呪い、といった所で有りましょうか。

日本人はこのお玉さんに代表される様に、自己主張に抑圧を受けて来た人種で有る様な事が書かれており、このお玉さんの悩みが明治の日本人の多くの人の悩みでも有った様です。自己主張ばかりして喧嘩っ早いモロッコ人と対照的の有ります。しかし日本人でもモロッコ人でも、先に記述致しました様に色々な人達がいいますから、この見方も絶対的なものでは有りません。原則と例外とが大体に於いて存在しております。これも自明の事有ります。

次にモロッコと日本の住居表示に付いて少し触れる事と致します。モロッコでは自分のプレナム（ファーストネーム）が最初に来てその後住所が続きます。日本ではこれが全く逆です。個人と全体とどちらに主眼を置いた思考様式・行動様式を取っているのか、言葉は思考様式・行動様式を表すと言いますが、これを見ても一目瞭然の事と思えます。



次に、インシャ・アッラー（神がそうなる様にと望んでそうなる。神の思し召し。）、カサブランカ便り第二便でこの問題に触れております。モロッコ人は待ち合わせ時間を守る事は稀で有ります。そして遅れた場合等にインシャ・アッラーと言えば大体それで通ってしまいます。しかし日本人はJR等も原則的には時間通りに運転しますし、私と家内とのデートでも遅れた事は二人とも唯の一度も有りません。ところがモロッコではメクネスに出張指導に行く時、昨年は一時間半、本年は一時間待たされました。これがごく当たり前に通用しております。

次に、ゴミのポイ捨て。日本人もガムの包み紙やタバコの吸殻等を路上にポイ捨てる輩を散見しますが、ここモロッコのそれは、老若男女一日五回もお祈りをする割には所構わずゴミのポイ捨てです。清掃する人の事なんか全く念頭に無い様です。日本人でも家（うち）さえ良ければ外はどうでもといった振る舞いを企業・政治家等しているのを多々目にしますが、モロッコのそれは凄まじいものです。私の住んでいるカサブランカの路上にも至る所にゴミが散乱しております。交差点の地下通路何かはゴミの山で通行不可能な有様です。

物乞いの多さも目に余る感じです。私が子供の頃には渋谷辺りで物乞いしているのを見かけましたが、モロッコでは、ここかしこに物乞いがいます。イスラム教では喜捨と言ひ、豊かな人が貧し

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

い人に施しをする様に、との戒律が有ります。このイスラム教の戒律がこの国を支配している為、数多くの物乞いが見られます。物乞いで十分食べて行けるのでしょ。

また、信号が変わると間髪を入れず後ろの車が前の車に警笛を鳴らして発進を促します。日本ではあまり見かけません。



赤いアフリカ大陸、緑の日本列島、飛行機の上からモロッコと日本を見た感想です。アッラー・アクバルの一神教と八百万の神を拝む日本人。自己主張の強いモロッコ人と自己主張の少ない日本人。ゴミポイ捨てのモロッコ人と割と几帳面な日本人。色々な例として差別性を少々羅列してみました。しかし原則と例外が殆どの場合に有ります。

拙文「日本人とモロッコ人」も結局、日本人とモロッコ人との比較に於いて、自分とは何なのか？いかなる存在なのか？日本人とは何か？JICAボランティアとは何か？私がモロッコ人といかに関わって来た

か？JICAボランティアとは何で有ったのか？どうすれば良かったか？はたまた国際社会の日本はいかに有るべきものなのか？等々、過去の反省と今後の展望に繋げる為の洞察資料なのかも知れません。引いては当地モロッコで仕事をしている全JICAボランティア・職員、はたまたモロッコ中の日本人全員に及ぶものなので有りましょう。

「敵を知り己を知れば百戦危うからず。」との孫子の有名な言葉が有ります。また、カサブランカ便り第三便で少々触れたように、アメリカの経営学者M・P・フォレット女史によればコンフリクト(葛藤)を解決する手段として、逃避(夫婦であれば離婚)・対決(夫婦喧嘩)・統合(協調とハーモニー、お互いの良い所を見出し、お互いが幸福になる。)がありますが、私、又我々JICAボランティア、はたまた今後の国際社会における日本において、自分の意思決定に伴う随伴的結果までを見越した統合の思考・方法・手段が求められるものなので有りましょう。



私はモロッコで日本的になるべく協調を図りながらやって来ました。しかし、柔道のプロで有る私は言うべき事は今後ともキチンと言う所存ですが、JICAの目的は国際協力なので、相手に理解してもらえるコミュニケーションの方法を色々と模索しながら活動しております。



さて、今まで色々と述べて参りました。私がカサブランカに来てこの様な思考様式・行動様式を取るモロッコ人に対して時に辟易する事も有りましたが、日本的なマア・マア・マアとか柔道の体捌きで、モロッコ人の自己主張の強さを捌いておりました。

しつこく繰り返しますが、M・P・フォレット女史は「人とはコンフリクト(葛藤)の連続で有る。これを解決するには対決・逃避・統合の三種類が有り、統合

関 雅夫さん（平成 23 年 6 月）

が一番良い。」と述べております。私はここモロッコに約二年前、右も左も良く解らず赴任して参りました。「敵を知り己を知れば百戦危うからず。」と孫子の有名な言葉で有りますが、モロッコ人を理解し、そして私がモロッコ人を受け入れて、何とか上手く統合出来たでしょうか？

モロッコ王国の柔道にはまだまだ未熟な点があります。「心・技・体」の理解不足、試合開始線を貼る青と白のテープの質の問題、救急セットを置いて無い等、今後の課題が山積しておりますが、私はJICAの目的である国際協力に沿う様、何とかやって参りました。

色々な事が有りましたが、私の二年間に及ぶ柔道ボランティア活動も、この9月27日でもう直ぐ帰国の運びとなりました。日本人とモロッコ人、私日本人柔道家とモロッコ人柔道家・柔道屋等々上手く統合して、これからも仲良く、嘉納治五郎師範の目指した理想の如く精力善用・自他共栄の精神で、仲良くやって行きたいと思っております。

日本の皆様も時には喧嘩も雨降って地固まるとか申しますので必要な事かと思いますが、M・P・フォレット女史の如く、お互いの良い点を見出し、お互いが上手く統合されて幸福な生活を送れる事を、ここモロッコ王国カサブランカより皆様のご健康とご健勝とを心から願っております。それでは皆様、お体ご自愛の上元気で過ごして下さい。淀川長治ばりですが、さよなら・さよなら・さよなら。敬具

